コロナ禍における学術文献の計量的分析

－流行期から 5 類感染症への移行を経て－

城山泰彦　(KIYAMA Yasuhiko)
順天堂大学　本郷・お茶の水キャンパス学術メディアセンター

Ⅰ．背景と目的

2020 年初頭に起きたコロナ禍は、2023 年 5 月 8 日に新型コロナウイルス感染症の感染法上の位置づけが 5 類感染症となり、ひとつの区切りを迎えた。大きく変化したライフスタイルは徐々に戻りつつあると感じるが、この期間にオンラインを通じたコミュニケーションが一気に浸透するなどの変化がみられた。第 39 回大会で「コロナ禍における学術コミュニケーションの計量的分析：国内医学系の学会と学術文献を対象として」を報告して、学会開催や学術文献の動向等を確認した。本研究は、コロナ禍以降の研究動向について計量的な分析を試み、研究活動における影響と変化を確認することを目的とした。

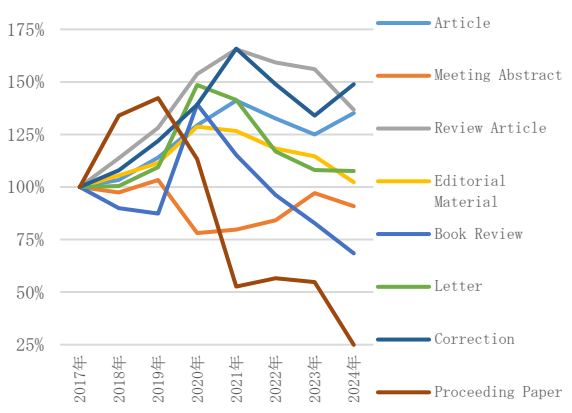
Ⅱ．調査方法と調査項目

医学系の学術文献を中心として、計量的な分析をおこなった。学術文献は 2017 年から 2024 年を対象に、研究評価ツール InCites Benchmarking ＆ Analytics (InCites)と引用索引データベース Web of Science (WoS)を用いて調査した。すべての学問分野、臨床医学分野、基礎医学分野、そして COVID-19 文献が多く含まれる医学分野において、文献数・記事区分・引用・国際共著等の経時的な変化を確認した。

昨年調査した、日本医学会に属する 142 分科会（学会）の学術集会の開催形式について、学会フェブサイトから 2024 年度のデータを確認して、データを補完した。

Ⅲ．結果と考察

WoS における臨床医学分野の記事区分別ごとの文献数は、2017 年の文献数を 100%とした変化は下図となった。ほとんどの記事区分が 2020 年から 2022 年に大きな影響を受けていた。減少は“Proceeding Paper”と“Book Review”で、“Meeting Abstract”は一時期の減少から回復しつつある。増加は“Correction”と“Review Article”と“Article”であり、コロナ禍時期の一時的な増加から近年は落ち着きつつある。



医学会の開催形式は対面開催に戻す傾向がみられ、規模が大きな学会ほどハイブリッド開催等の多様な形式で開催されていた。

学術情報の変化を経時的に確認することで、コロナ禍の状況を記録するとともに、医学図書館員にできることを考えてみたい。